



「地球サミット物語」 (A New Name for Peace)

フィリップ・シャベコフ著
しみずめぐみ/さいとうけいじ訳
JCA 出版, 2003年1月,
300頁, 1800円 (本体価格)

昨年(2002年)8月末～9月初めに、南アフリカ共和国・ヨハネスブルグで開かれた、国連の「持続可能な開発に関する世界首脳会議(WSSD, ヨハネスブルグ・サミット)」は、別名「リオ+10」とも呼ばれる。この会議では、10年前(1992年)にブラジル・リオデジャネイロで開かれた、国連環境開発会議(UNCED, 地球サミット, リオ・サミット)で採択された、「アジェンダ21」(環境分野における国際的取組みの行動計画)などの成果がその後どう進展したかが見直され、21世紀における国際的取組みの指針が示された。

本書の原著は、困難な中でリオ・サミットをまとめあげること貢献した、会議事務局長モーリス・ストロング(Maurice F. Strong)の果たした役割を中心に、リオ・サミットの経緯と意義を数年後(1996年)に振り返って書いたものである。内容は、多面にわたる、学際的な地球環境問題に関わる。訳者は、ヨハネスブルグ・サミットを経て、改めてリオ・サミットの意義がますます増大しているという観点から、出版後6年余たった原著の翻訳を行ったものと思われる。実際、訳者の1人は、ヨハネスブルグ・サミットや関連のNGOフォーラムに参加しており、報告と所感をあとがきに述べている。

著者シャベコフ(Philip Shabecoff)は、少年時代、ニューヨークの臨時本部で開かれた初の国連総会参加者を柵の外から凝視した経験から、国連の活動に興味を持ちつつ、長年ニューヨーク・タイムズ記者として国際的に活躍してきた、米国のジャーナリストである。リオ・サミットの準備段階で、ストロングから総合記録者として事務局のスタッフになることを打診された際、あえて独立な立場で取材することを選び、事務局入りは固辞するとともに、逆に無条件の自由な取材を了承してもらっている。

リオ・サミットの背景として、環境問題に対するこれまでの歴史、特に19世紀にさかのぼる、自然と人の調和としての「自然保護(Conservation)」や、野生

生物最優先の観点に立つ「自然保存(Preservation)」など異なった考え方や、それらに基づくさまざまな活動や政策の変遷が示されている。また、第二次世界大戦後、急速な人口増加や産業活動拡大が、地球環境へ影響を及ぼすことに関して憂慮されるようになり、特に合成化学物質による環境汚染を指摘した「沈黙の春」(レイチェル・カーソン<Rachel Carson>, 1962)や、地球の許容力の限界を指摘した「成長の限界」(ローマ・クラブ<25か国の専門家・企業家からなる協議体>, 1972年)などが環境問題に対する関心を高める役割を果たしたと述べている。

国連は、環境問題に早くから取り組み、1949年の資源保護・利用に関する科学会議、1968年の生物圏会議、などを経て、1972年には、人間環境会議(ストックホルム会議)を開くに至っており、この会議で、ストロングは事務局長を務めている。ここに至って、著者は、ストロングの、カナダでの貧しい生い立ちからの成功物語をつづるとともに、国連に貢献する仕事への変わらぬ情熱が、ストックホルム会議、リオ・サミットへ生かされてゆく過程を追う。

一方、科学と政治に関しては、「第6章(科学者と政治)」や「第8章(地球政治と環境問題)」で論じている。1980年代から目立ってきた、スエーデンのバート・ボリンなど、科学者による、温暖化の指摘と対応政策の要請の活動に言及している。さらに、1988年の熱波・干ばつに見舞われた米国内での上院の委員会でのジェームス・ハンセン(NASA)の証言と、賛否両論の波紋にも言及している。1988年に成立した、気候変動に関する政府間パネル(IPCC)についても、簡単に触れている。

環境と科学の問題でも、オゾン層破壊物質の規制に関する、モントリオール議定書の成立(1987年)について、「世界は外交史上例のない一步を踏み出したことになった。」と評価している。地球温暖化についてはなお道のりが続き、1992年に、国連気候変動枠組み条約(UNFCCC)が採択され、その署名活動そのものが、リオ・サミットに持ち込まれている。

リオ・サミットの準備会合を重ねる中で、地球環境の観点から、持続可能な開発の計画を打ち出すための資金調達に苦勞するストロングの活動が記述され、日本に関しても言及している。リオ・サミットは、南北問題が根底にあり、ストロングの事務局としての多大の努力による調整が必要であった。NGOの参加など新たな状況の下に、地球憲章、アジェンダ21などが採

択された。サミット後における、世界の地域、特に途上国や、先進国大都市の退廃地区などの状況についても述べている。

IPCCの果たしてきた役割、その中での気候モデルによる予測研究の成果などの記述が乏しいのは若干気

になるが、本書は、著者やストロングなどが、大きな関心と懸念をもって、子々孫々に及ぶ地球環境の問題に取り組む姿勢が伝わる書である。

(地球フロンティア研究システム 近藤洋輝)

2003年度春季大会の報告

2003年度春季大会は、つくば国際会議場（茨城県つくば市）を会場として2003年5月21日（水）～24日（土）に行われた。最近の講演数増加による過密日程や講演時間短縮の緩和を目的として、今大会では従来の三日間から四日間への会期の延長が試行された。また平日の参加が難しい会員のために、初めて土曜日にも開催されることとなった。参加者数（前納登録者と当日受付者の合計）は890名（一般会員556名、学生会員182名、非会員152名）で、このうち土曜日だけの参加は81名であった。

2日目午後には、つくば国際会議場大ホールにおいて総会が開かれ、津田敏隆会員に日本気象学会賞が、木村龍治会員と高橋劭会員に藤原賞が授与された。総会終了後、東アジア地域における学会間交流推進を目指して今大会から催された「東アジア気象学会交流会」が行われ、韓国気象学会を代表して招待された Jong-Ghap Jhun 教授（韓国気象学会長、ソウル大学）と In-Sik Kang 教授（ソウル大学）のお二方からご講演を頂

いた。引き続き、三名の受賞者による記念講演が行われた。3日目午後にはつくば国際会議場大ホールにおいて「ヒートアイランドー熱帯夜の熱収支ー」と題して大会シンポジウムが行われた。

今回はポスター及び口頭発表による一般講演と特定のテーマに基づいてコンペーターが編成する7つの専門分科会とが行われた。一般講演の発表申込み件数は418件（内訳はポスターが284件、口頭発表が134件）、分科会は70件で計488件となり、2002年度春季大会に記録した466件を更新し過去最高の件数となった。

会期中およびその前日には、個別のテーマによる研究会が4件開かれた。

最後に、今大会実行委員会として大会準備・運営にご尽力頂いた筑波大学地球科学系、国立環境研究所、産業技術総合研究所、農業環境技術研究所、防災科学技術研究所の皆様へ深く感謝の意を表します。

2003年6月 講演企画委員会

2003年度秋季大会における保育施設の紹介について

標記大会（10月15～17日、宮城県民会館等）に参加される会員のため下記の保育施設を紹介しますので、保育を希望される方は直接施設へ問い合わせ願います。

施設名：「ベビーホームおのぞら」

住 所：仙台市青葉区立町23-24

定禅寺通りライオンズマンション204

電 話：022-262-8633

保育時間：希望する時間

2003年度秋季大会実行委員会

なお、一時保育施設を利用する会員には、実行委員会で費用の一部を補助します。利用を予定される方は10月8日（水）までにご連絡ください。

不明点、その他の問い合わせも下記にお願いします。

連絡先：仙台市宮城野区五輪1-3-15 仙台管区気象台

日本気象学会東北支部事務局 佐藤信榮

Tel：022-297-8105, Fax：022-297-8134

e-mail：satou-nobu@met.kishou.go.jp